アフガニスタン家族のために

昨年の「すべてのいのちを守るための特定献金」の一部があてられたアフガニスタン家族の支援。支援活動の概要を伺った。

2021年8月、アフガニスタンでは米軍が完全撤退し、あっという間にイスラム原理主義集団のタリバンが街を闊歩し、現地は大混乱に陥りました。迫害の恐怖から逃れようとする人びとの声を聴き、シナピス（教区社会活動センター）では一人でも多くの人の命が助かるよう活動を始めました。具体的には、日本在住の家族と力を合わせて、日本へ呼び寄せられるよう努力することです。アフガニスタンから隣国のイランやパキスタンまで退避した人にビザが得られるよう日本大使館にかけあいました。こうして関わった5家族のうち、無事に日本までたどりついたのは1家族だけでしたが、7歳、16歳の子どもを含む4人の命を救うことができました。

この家族に日本へのビザが出たのが今年2月、渡航費は全部で50万円ほどかかりました。このうちの20万円を「すべてのいのちを守るための特定献金」から援助していただきました（本紙2月号3面参照）。

「私たちは2021年8月に一度死んだ。そして2022年2月に再び生き返った」。来日したときに父親が語った言葉です。

イランには安全な第三国へ退避できるビザを待つアフガニスタン人たちがいます。日本への呼び寄せは叶わなくても、世界のカトリック教会のネットワークを生かして、一人でも多くの難民を救出できるよう努力を続けています。どうぞ引き続きご支援とお祈りをお願いいたします。

（文　シナピス事務局　ビスカルド篤子）

羽田空港に到着したアフガニスタン避難民の家族（本紙6月号5面「生きる」コラム参照）

ウクライナ人道支援

～現地ポーランドから支援者と難民の声～

月修での報告会の様子

2月24日にロシアによるウクライナ侵攻が開始されて早5か月。日本での報道はやや下火となっている。そのような状況下、隣国ポーランドにおいてウクライナ難民支援を行っている兵頭（ひょうどう） 博校長先生（サンスター日本語学校）からボランティア活動の様子を聴く機会がもうけられた。

活動報告会は2回開催され、7月24日（日）は15時から一般信徒に向けて、27日（水）には司牧者の月修において行われた。急遽決まった報告会だったこともあり、24日の参加者は残念ながら少なかったが、司祭月修では49人が参加した。

報告会では、はじめに、現在ポーランドに避難してきているウクライナ難民の現状を話された。兵頭先生によると、日本の報道とポーランドの現状とは大きくかけ離れているとのこと。自身が撮影した写真を見せながら先生は話されたが、その中には、20時間以上かけてポーランドに到着し、ほっとして笑顔を浮かべる人もいた。その一方で、着の身着のまま逃げてきたこともあり、泊まる場所も食事もできない人が実際多くいることも語られた。

また炊き出しの現場では、毎食4000人以上もの難民が訪れ、熱気が充満し休む間もなく働く支援現場の過酷な現状についても話された。その炊き出し支援も6月30日をもって閉鎖となった。仕事も住居もない人びとが危険を承知でウクライナへ帰っていく現状も伝えられた。

その後、Zoom（ズーム）（オンライン会議ツール）をとおして、ウクライナから避難してきた日本語を学ぶ青年ボグダンさん、一度避難したものの夫のいるウクライナへ戻った女性アンナさん、そして、母親と避難した12歳の少女ミラーニャさんなどの現地からの生の声も聴くことができた。彼らが私たちに望んでいることは、まず現状を知ってもらうことであり、特に少女は平和の実現を願っていた。

兵頭先生は9月には再びポーランドに戻り、独自に子どもたちへの支援を続ける。そのための支援を参加者に広く求めた。

（文　布施教会主任　上田憲（けん）神父）

近畿キリスト教教誨師・
篤志面接委員連絡協議会 研修会

子どもを責めるな、親を責めるな

7月25～26日（月・火）、プロテスタントの大阪弟子教会（大阪市中央区）にて、近畿キリスト教教誨師・篤志面接委員連絡協議会の研修会が約30人の教誨師、篤志面接委員、信徒の参加で行われた。

研修会の講師は、学生時代から少年非行問題に取り組み、300人以上の非行青少年と関わってこられた野口善國（よしくに）弁護士。講演では、これまでに出会った少年少女との関わりを具体的に話された。

野口弁護士は青少年と一緒に行動し、遊び、勉強する中で、彼らの立ち直りを見つめ続けてこられた。本人や警察からの求めに応じて保護に動いたり、例えば一緒にボウリングして遊ぶなかで少年の行動を観察してどのように対応するかを考えた。また一緒に勉強すると、自分でも学び難関大学に合格するまでになる子どももいると話された。

それらの体験から明らかにされたのは、非行少年たちは特別な人間ではなく、普通のどこにでもいる人間だが、家庭環境や社会の状況によって非行に走ってしまったということ。

参加者は数々のケースを聴きながら、非行の問題は本人だけの問題ではなく、家族の問題であり、社会の問題であることが理解できた。子どもを中心とした家族の在り方、社会の在り方をどうしてゆけばよいのかということが重要な問題であることが共有できた。今回の研修は子育て・孫育てに悩む世代の福音になる話だったと言える。「子どもを責めるな、親を責めるな」――悲惨な現実の中で語られる温かみのある言葉に、救いを感じた二日間になった。

大阪弟子教会の創立者で、刑務所など矯正施設からの出所者を支援している金沢泰裕（やすひろ）牧師は、二日目の朝の礼拝で説教に立ち「教会にはさまざまな人が訪れる。更生できた人もいた。できなかった人もいた。裏切って消えていった人もいた。その関わりを神に感謝しながら、奉仕の心で続けてきたし、これからも続けたい」と力強く語った。金沢牧師の言葉を各自が確認しながら、散会した。

（文　川邨（むら）裕明神父）

開会礼拝で祈る参加者